



# 重症児教育学の立場から〈ヨコへの発達〉結像とその後 : びわこ学園を中心に

垂髪, あかり

---

**(Citation)**

日本教育学会第81回大会

**(Issue Date)**

2022-08-24

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Author's Original

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476330>



糸賀一雄らの「ヨコへの発達」をめぐる対話  
：領域横断による読み解き

重症児教育学の立場から〈ヨコへの発達〉結像とその後  
びわこ学園を中心に

神戸松蔭女子学院大学  
垂髪あかり

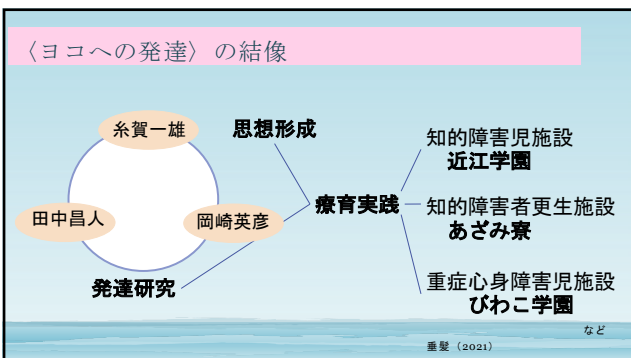
1

〈ヨコへの発達〉の定義

横の広がりとは何かといえば、**かけがえないその人の個性**です。他の何物ももって代えることのできない個性が、あらゆる発達段階の中味をなしているということです。この中味が個性的にぐんぐんと形成されて行く、**もうA子ちゃんはA子ちゃんなんだという個性が、一歳なら一歳のなかに、豊かに豊かになって行く**わけなのです。この豊かさを形成して行くのが教育であり、療育ということなのです。

糸賀一雄（1966a）「この子を世の光に（二）—重症児の生産性について—」

2



3

〈ヨコへの発達〉の結像

初出は1966年

社会背景：終戦後、高度経済成長

子ども観、発達観、障害者観：能力主義、選別主義

「社会の厄介」にならないために、社会的に自立ができる者への教育が最優先

4

〈ヨコへの発達〉の結像

①近江学園「さくら組」（1952年～）、「杉の子」組（1953年～）  
重症児の「感ずる世界」「意欲する世界」への気づき

②あざみ寮 知的障害女子の人格形成を目指した実践（1959年～）  
「発達の認識」「発達の共感」する視点

③びわこ学園 重症心身障害児への実践（1963年～）「発達の共感」「横」という視点

知的障害女子／懸命に生きる重症児たちと  
それに共感する職員との「発達の共感」関係

無限に、豊かに、「自己実現」していく姿

1965年 「横へのふくらみ」（田中昌人）  
1966年 「横（横軸）の発達」（糸賀一雄） 垂髪（2021）

5

〈ヨコへの発達〉の結像までの道のり

1946年 知的障害児施設 近江学園設立  
知的障害児と普通児の提携、生産教育を目指す

知的障害が重い子どもたちを  
「永遠の幼児」と呼ぶ

でも最初、糸賀自身も

糸賀（1950）

6

「ヨコへの発達」の結像までの道のり

1952年 比較的障害の重い子どもたち  
「新さくら組」を結成

試行錯誤しながらなんとか毎日を回す  
子どもたちの努力する姿、表情を捉え、

「この子どもたちひとりひとりの無限に秘めている可能性に目覚めさせられてきた」

糸賀一雄 (2013)

7

「ヨコへの発達」の結像までの道のり

1953年 医療の支援が必要な子どもたち  
「杉の子組」結成

障害の比較的重い子どもたちへ手探りの取り組み

「白痴も、肢体不自由児も、二重三重の障害の子どもたちも、だれひとりの例外なく、**感ずる世界、意欲する世界**をもっている。ただ生かしておけば良いのではなく、どのような生き方をしたいと思っているのかを知り、語り合い、触れ合い、お互いにより高い生き方へと高められてゆくような指導がなされなければならない」

糸賀一雄 (1953)

8

「ヨコへの発達」の結像までの道のり

1956年 知的障害女子のための「あざみ寮」での実践  
少女が内面を豊かにしながら人格を形成していく過程に触れる

「あざみ寮は、Aさんの技術的伸びという発達の外皮を**人格形成という発達の中味との関係で共感した**」

田中嘉人 (1964)

9

糸賀、岡崎、田中の姿勢、悩み・葛藤

手探りの療育の始動、試行錯誤・  
目標と子どもたちの実態との激しい乖離

それでも、子どもたちの「心の内」を、  
「内面」を、見たい、知りたい、触れたい という強い思い

↑↓

障害のある子、重い子の「生きるよろこび」とは？  
「生き方」とは？

自問自答を続ける日々・・・

10

「ヨコへの発達」の結像までの道のり

1961年 近江学園「発達保障」の提起  
1963年 重症心身障害児施設 びわこ学園での実践  
重症の子どもたちと、「全力で相対する」

「風の中の灯のような生命も、その発達がしっかりと保障される仕組みを実現し、どんな生命も、生まれてきた甲斐があったことを、何らかの形で実証しなければならない」

糸賀一雄 (1964a)

11

「ヨコへの発達」の結像～びわこ学園の実践

世間では親の手によって重症児者の命が絶たれる事件が相次ぐなか、  
糸賀や岡崎は、施設の運営に苦心しながらも、  
重症児者たちが生命を燃やしながら懸命に生きる姿に出会い、  
一人ひとりの「生命」と、真正面から取り組んでいく

「その生命はかけがえないものであって、全世界の富をもってしても**買うことができないものなのだ**」

糸賀一雄 (1964b)

「生命」・「存在」そのものの絶対肯定

12

糸賀、岡崎の姿勢、悩み・葛藤

療育や施設の在り方について悩み、子どもたちに生き甲斐ある日々を、人生を、歩ませてやりたいと願う実践を続ける・・・  
しかし、悩めば悩むほど、「彼らの生き甲斐とは？」という本質的な疑問

重症児者の価値は「生きていることそのもの」  
だけであろうか？

「白痴の人たちのどんな生き方が  
本当の幸せであろうか？」

糸賀一雄 (1965a)

13

「ヨコへの発達」の結像～びわこ学園の実践

悩み、試行錯誤しながらも療育を続ける・・・  
子どもたちの「変化」に気がつく  
「安定」を破る方向に子どもたちを方向づける  
「ベッドからプレイルームへ、プレイルームから戸外へ、園外へ」

「どんなに重い障害をもっている、人間としての生きがいとなるものがある」「それはあくまでも人間としての発達をおすすめる生活のなかで見いだされるものである」 岡崎英彦 (1964)

「人間には誰にも人並みでないところがある。つまりいろいろな面がある。しかしそれぞれ誰かに置きかえられることなく、その人なりに一生懸命に生きている。発達しつつづけているのである」 糸賀一雄 (1965b)

14

「ヨコへの発達」の結像～びわこ学園の実践

重ねられる発達研究

重症児者に対して初めて、「**発達の共感**」という言葉を使う

重症児者もそれに取り組む側の人間も、同じ「発達」という次元で「共感」することによって「**他の人の何ものにも置き換えがたい主体的な生き方**」をしていく。  
それこそが、重症児者における「**自己実現**」なのだ

田中眞人 (1964)

15

「ヨコへの発達」の結像～びわこ学園の実践

「**発達**」への確信

「どんな子どもも発達する。  
たとえ重症な心身障害のために寝たっきりの子どもであっても発達する」

糸賀一雄 (1965b)

16

「ヨコへの発達」の結像～びわこ学園の実践

糸賀の「発達」

「二歳は二歳として、三歳は三歳として、そのおのおのの段階のなかに実現しなければならぬ無限の可能性をもつのであるから、この可能性を豊かにみらせることが発達の中味である。  
豊かな人生、生きがいのある人生は、あらゆる現在をそれ自体として充実させることにある。そのことがあふれて次の段階に発達していくような生活であらうしたい」

糸賀一雄 (1965c)

17

「ヨコへの発達」の結像～いよいよ

田中の「横へのふくらみ」

「形式としては普通児の発達の様式に近づけるようにうけとめるかもしれない。しかし、そこでなされる実践活動は必ずや発達に障害を持っている人たちの発達保障技術に大切なことを教えてくれるにちがいない。そして、それは発達に障害をもっている人と同じ道を通っている普通児の発達保障の技術にも多くの貢献をするのである。なんとすれば、これはいわば**横へのふくらみが発達をうえにあげるというゆたかさを基盤とする技術**である、現在の教育競争の時代における上へおしやるだけという貧困さを基盤とする技術を批判する立場だからである。このとりくみはまさに未知への挑戦である。」

田中眞人 (1965)

18

「ヨコへの発達」の結像

近江学園、びわこ学園の実践を田中が理論的に説明

それは、高次の可逆操作特性が獲得できないでいる時、適切な集団、適切な労働が用意されていると、課題を前可逆操作なりのやり方で解決していくことによって、次の可逆操作特性を獲得しつつある人よりも上手くやりこなしていくことがあるということです。それは単に年をとり、同一操作特性が粗大化し習慣的パターンができたから、できるようになったのではありません。同一操作特性の交換性が高まり、交換性が高まることによって、他と置き換えのできない代理不可能な主体性ができていく中で、さらに状況に応じた交換性の高まりを発揮していることなのです。

田中眞人 (1966)

19

「ヨコへの発達」の創出

近江学園、びわこ学園の実践を田中が理論的に説明

つまり、精神的若さが光り輝いていくという仕方でこなしていったのです。生活年齢はそのような効果をもち、思春期なども同一操作特性の交換性を高めていく方向での質的転換期として評価していくことが必要なようです。次元形成期が矛盾を知ってゆたかさを形成していったが、高次化が達成されないとすると、そのゆたかさが同一可逆操作特性の交換性を高めていくことによって、代理不可能な主体性を形成していくという【横への発達】の基礎になるのだということがわかってきたのです。発達は上へ伸びることというのは、わたしたちの発達理解の仕方が発達障害を起こしていた事ことに他なりません。

田中眞人 (1966)

20

「ヨコへの発達」の結像

生命の先にある重症児者の価値

横軸の発達

「そういういろいろとちがった発達の段階のどれを見ても、その発達段階なりの生活がある。その生活が、ただ寝ているだけであっても、はうだけであっても、またやっと立っているだけであっても、豊かな内容のあるものに育てられるかが問題なのである。縦軸の発達ではほとんど絶望であっても、横軸の発達は無限といってもよい」

糸賀一雄 (1968)

21

「ヨコへの発達」の結像

横軸の発達

「人間の価値はこの縦軸の比較の世界で相対的に評価されるばかりでなく、横軸への無限の挑戦の中に見られる絶対的な価値の基準をもっている」

糸賀一雄 (1968)

22

「ヨコへの発達」の結像

横軸の発達

「三歳の精神発達ととまっているように見えるひとも、その三歳という発達段階の中身が無限に豊かに充実していく生きかたがあるのです。生涯かかってそれを充実させていく値打ちが充分にあるのです。そういうことが可能になるような制度や体制や技術をととのえなければならぬ。」

糸賀一雄 (1966b)

23

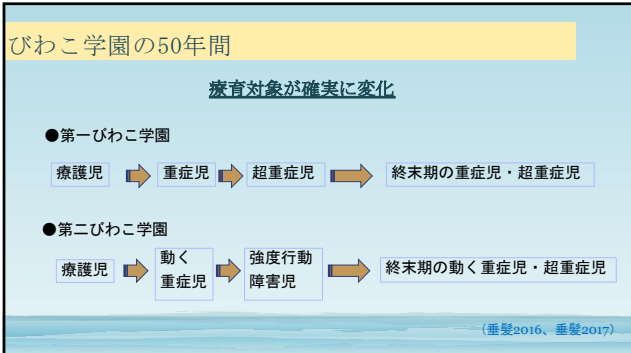
それから50年・・・現代のびわこ学園では

〈ヨコへの発達〉は継承されているのか？

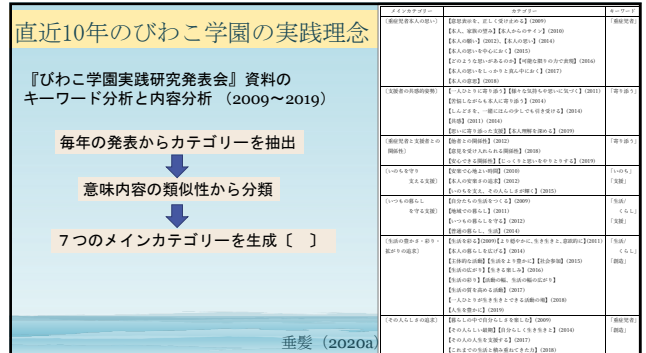
〈ヨコへの発達〉はどのように

実践のなかに取り込まれているのか？

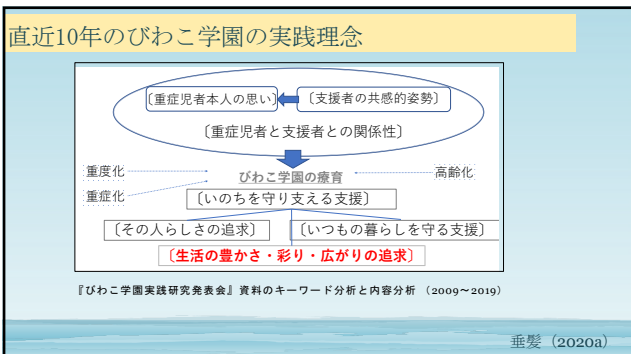
24



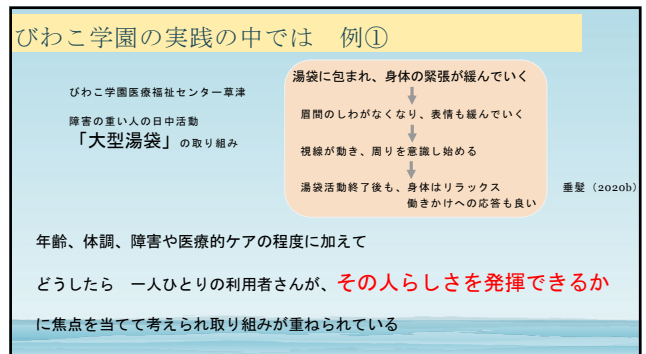
25



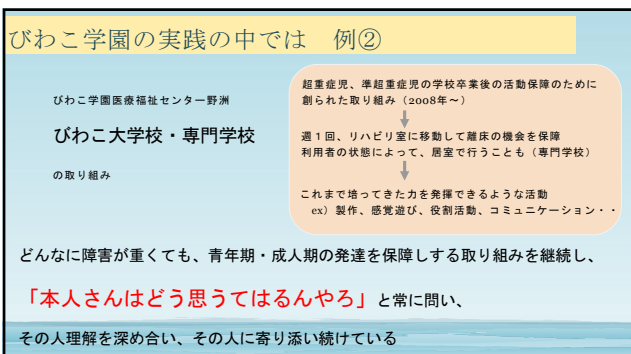
26



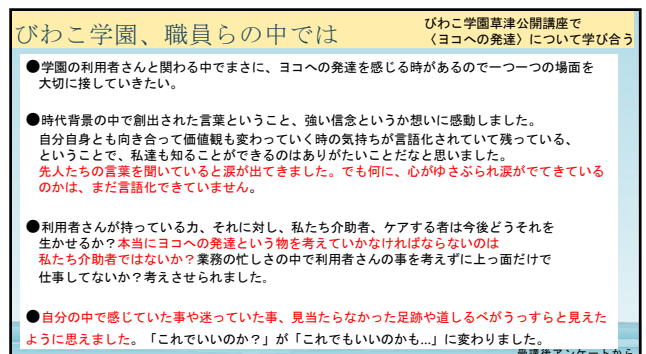
27



28



29



30

### びわこ学園、職員らの中では

びわこ学園草津公開講座で  
〈ヨコへの発達〉について学び合う

全ての人間に共通する形式的な発達  
外見上、評価しやすい (発達)

限界がある！  
☆この面積が広がるほど、その人の人生は充実し、豊かなものとなる

無限に広がるもの

ヨコ  
日々の生活の積み重ね  
人との関わり  
感情の変化  
外見的に評価しにくい

人生→個性の形成  
1人1人で違うもの

受講後アンケートから

31

### びわこ学園、職員らの中では

日々の実践のなかで職員らが感じ、受け止めているが  
言語化されていない 障害の重い人たちの姿

↓

〈ヨコへの発達〉の創出過程、そこにある糸賀らの苦闘・葛藤を  
自分自身の実践 と 自分自身の見方 (価値観) と重ね  
整理し始める姿がみられた

32

### 糸賀らの追体験として (再考)

糸賀・岡崎・田中 (第1・2巻)  
1950~1960年代: 近江学園・びわこ学園・あざみ寮

1990~2010年代: びわこ学園

重慶 (2021)

〈ヨコへの発達〉への確信  
時代は変わっても、追体験が繰り返され続けている

33

#### 【引用文献】

- 糸賀一雄 (1950) 「問題児の対策」『社会福祉研究』第2号、糸賀一雄著作集刊行会編 (1982)、p. 328.
- 糸賀一雄 (1953) 「当面の諸問題」『近江学園年報』第8号、近江学園、pp. 1-17.
- 糸賀一雄 (1964a) 「静かなる迫力」『びわこ学園だより』創刊号
- 糸賀一雄 (1964b) 「社会の変化のなかで立つ家庭教育」、未公開資料、p. 19.
- 糸賀一雄 (1964c) 「精神薄弱児対策の問題点—特に福祉対策の現状と課題」『精神薄弱児研究』第74号、pp. 4-7 (初出)、糸賀一雄著作集刊行会編 (1983) 所収、p. 384.
- 糸賀一雄 (1965a) 「社会福祉施設について—重症心身障害児施設の必然性」『兵庫県社会福祉協議会』、pp. 109-131 (初出)、糸賀一雄著作集刊行会編 (1983) 『糸賀一雄著作集III 日本放送出版協会』所収、p. 363.
- 糸賀一雄 (1965b) 「ゆたかな発達を」『滋賀社会福祉』第83号、p. 3 (初出)、糸賀一雄著作集刊行会編 (1983) 所収、p. 349
- 糸賀一雄 (1965c) 「指導体制評価についてのわれわれの立場」『近江学園年報』第11号、近江学園、p. 8.
- 糸賀一雄 (1966a) 「この子らを世の光に (二) —重症心身障害児の生産性について」『両視の集い』、第128号、p. 19.
- 糸賀一雄 (1966b) 「この子らを世の光に」『手をつなぐ親たち』、第128号、pp. 4-8.
- 糸賀一雄 (1968) 「特殊教育の思想的背景—人間の価値観について」『特殊教育事典』(初出)、糸賀一雄著作集刊行会編 (1983) 所収、p. 402

34

- 田中昌人 (1964) 「重症心身障害児の発達—1—」『愛護』第82号、p. 19
- 田中昌人 (1965) 「第一教育部の活動—これからの指導のふかまりのために—」『近江学園年報』第11号、近江学園、p. 97.
- 田中昌人 (1966) 「すべての子どもの発達の権利をからとるために—新しい『心身障害児の発達と教育』の理論—」大泉博編 (2011) 『日本の子ども研究—明治・大正・昭和—第13巻、田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成』クレス出版所収、p. 622
- 重慶あかり (2016) 「重症心身障害児施設『第一びわこ学園』における『発達保障』の思想と実践」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第10巻第1号、pp. 17-29.
- 重慶あかり (2017) 「重症心身障害児施設『第二びわこ学園』における『発達保障』の思想と実践」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第10巻第2号、pp. 91-104.
- 重慶あかり (2020a) 「重症心身障害児施設『びわこ学園』における発達保障の思想と実践—2010年代における『いのちと暮らしに寄り添う支援』の内実—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第14巻第1号、pp. 1-14.
- 重慶あかり (2020b) 「エピソード記述の特別支援教育学研究への援用可能性—重症心身障害児施設における療育実践の検証をとおして—」『日本教育学会大会研究発表要項』第79巻、pp. 192-193.
- 重慶あかり (2021) 「近江学園・びわこ学園における重症児者の『発達保障』—〈ヨコへの発達〉の歴史的・思想的・実践的地位—」風間書房.

渡部昭男・國本真吾・重慶あかり編 糸賀一雄研究会 (2021) 『ひとと生まれて人間となる—糸賀一雄研究の新展開—』三学出版.

35